

群馬県現代俳句協会会報

No. 69

2023 年
1 月 10 日 発行

第三十回群馬県現代俳句協会大賞

大賞作品

「新樹光」

三 島 梅 子

落款を押して見上る望の月
筆立に並ぶ穂先や新樹光
耳澄ませ書の手休める初音かな
冬牡丹友の遺墨の鎮まれる
しだれ咲く山吹しばしペンを置く
春の香も墨のかおりも静寂かな
パンダ舎に人垣あふれ天高し
魂を込めて墨磨る秋気かな
書初めに気迫あふれる子らの顔
濃墨にこころ耕し初便り
山百合の白に勝りて磁器焼かる

実朝の歌しみじみと書く夜長
母と子の絆の夏や筆供養
虎の文字駆出してゐる賀状かな
子等の書の紙にあふれる星祭り
絵日傘をたたみ銀座の書道展
春の陽の硯の海はおだやかに
表具師の刷毛の動きや天高し
奉納の文字隆隆と夏祭
空海の筆のさばきや秋深し

受賞の言葉

三 島 梅 子

この度は第三十回群馬県現代俳句協会大賞を賜り御礼申し上げます。俳句歴は数十年あるものの、まだまだと自覚している私にとりまして、今回の受賞のお知らせはまず驚き、そして信じられない思いでした。

俳句とは無縁だった私が、書の師に勧められ句を作り始めた

のは昭和五十一年のことでした。当時、職場の何人かの友人と結社「石人」に入会、ここで出会った先生や句友との吟行、旅先での句会などを通して俳句の奥深さに魅了されました。

現在は結社「言霊俳句会」で中里麦外主宰の指導の下、作句に励んでおります。今回の受賞作は、長年取り組んでおります書道のなかで日々感じた思いを俳句にいたしました。人生の基軸となる「書」に焦点を絞りました俳句で賞をいただけましたことはこの上ない喜びです。

最後になりましたが、選考のためお時間を割いてくださいました先生方に心より感謝を申し上げます。

選後評・選考結果

第三十回群馬県現代俳句協会大賞は厳正な選考の結果、前橋市在住の本協会員の三島梅子氏に決定いたしました。応募総数五編の各選考委員の選後評、選考結果は次のとおりです。尚、本年度は準賞に該当する作品はありませんでした。

中里 麦外

今回の応募は、五編であった。「新樹光」「野分」「小鳥来る」を推した。

「新樹光」は、対象をほどよく内面化した作品群に注目した。魂を込めて墨磨る秋気かな

奉納の文字隆隆と夏祭

空海の筆のさばきや秋深し

「野分」は、詩眼の確かさが光っていた。

良く視れば良き面構へ雨蛙

春待つや尻屋岬の放ち馬

「小鳥来る」は、日常の哀歓をさりげなくうたっている作品が多い。

かなかなやみんな帰りてしまひけり

ともあれ、次回はより多くの力作が寄せられることを期待したいと思う。

安 富 耕 二

力作が多く、何度も読み返し、迷った末に一位に新樹光を選した。「新樹光」は書に情熱を注いでいるのにひかれた。

魂を込めて墨磨る秋気かな

落款を押して見上る望の月

書初めに気迫あふれる子らの顔

「小鳥来る」は相手を思いやる心がよく出ている。

夫に秘す耳の衰へ春寒し

無事手術済みしと聞くや春の月

「野分」は日常のことを上手に詠んでいる。

春眠を貪る妻の寝顔かな

酔ふほどに話膨らむ生身魂

リスの如く頬膨らませ葡萄食ぶ

「水墨画」は

あめんぼに水面凹ます重さあり

夏草に心を決めて立ち向ふ

の措辞が好きである。

「草矢」にも好きな句が多くあった。

原 田 要 三

五編を繰返し読み、「小鳥来る」と「水墨画」を推し、「新樹光」を次点とした。

「小鳥来る」日常を詠み、表現したい思いを的確に表現して

いる点に注目した。

夫に秘す耳の衰へ春寒し

肩を揉む婦省子の指ごつごつと

あれこれと家事の手を抜き障子貼る

「水墨画」平凡からの脱却を試みている。

おとうとは大きな手もて実梅もぐ

草取りにたたかふ氣持時忘る

夜の秋こころ描かんと水墨画

「新樹光」書をテーマに詠まれている。

耳澄ませ書の手休める初音かな

奉納の文字隆隆と夏祭

「野分」表現がやや雑な句があつた。

酔ふほどに話膨らむ生身魂

「草矢」やや単調な句が氣になつた。

節の夜鬼を眠らせ酒少し

次回は、より多くのチャレンジを期待したい。

堀越胡流

応募作品五編は少々淋しいが、五人の力作を熟読いたし選をさせて頂きました。

一位に推したのは「新樹光」で、書道をテーマとした落ち着いた句群に共感しました。

魂を込めて墨磨る秋氣かな

実朝の歌しみじみと書く夜長

空海の筆のさばきや秋深し

二位に推したのは「小鳥来る」で

母の忌や生家への道花吹雪

髪切りて踏み出す一歩夏帽子

「野分」より

酔ふほどに話膨らむ生身魂

「水墨画」より

あめんぼに水面凹ます重さあり

「草矢」より

神事より賜る蜜柑妻と分く

順位を付けるのに苦労しましたが、是非来年も大勢の皆様挑戦をお願いいたします。

今井 妙

第三十回大賞応募がたくさんあると楽しみにしておりました。五編だけで寂しいですね。何度も読ませていただきました。

第一位「新樹光」

魂を込めて墨磨る秋氣かな

書初めに氣迫あふれる子らの顔

お習字教室に行っていた時を思い出し、力強い生き生きとしている俳句と思い一位に。

第二位「水墨画」

群青に昏るる山湖や月見草

山の写生でしょうか。省略した処が伝わる。

第三位「小鳥来る」

病める身の愁ひ紛らす初音かな

体調を崩していたのかしら。初音が元氣にしてくれる。

第四位「野分」

第五位「草矢」

選を終えて。一句一句の提示する世界はとも魅力に溢れています。二十句を揃えることの難しさ。身に沁みて感じさせられました。

第 30 回群馬県現代俳句協会大賞得点一覧表

5	4	3	2	1	No.
野分	新樹光	草矢	小鳥来る	水墨画	タイトル
4 点	5 点	1 点	3 点	2 点	中里
3 点	5 点	1 点	4 点	2 点	安富
2 点	3 点	1 点	5 点	4 点	原田
2 点	5 点	1 点	3 点	4 点	今井
3 点	5 点	1 点	4 点	2 点	堀越
14 点	23 点	5 点	19 点	14 点	合計

※ 1 位 5 点、2 位 4 点、3 位 3 点、
4 位 2 点、5 位 1 点



第 27 回 吟行会 (前橋 大室公園)

秋の吟行会開催

古墳に遊ぶ

群馬県現代俳句協会主催の第二十七回吟行会が十月二日(日)、前橋市・大室公園を会場に開催されました。雄大な赤城山を背景に大小十一基の古墳を有する大室公園に協会員十五名が参加、コロナ禍を忘れ、爽やかな秋晴れの下、吟行を楽しみました。

また、吟行会終了後、群馬の俳人・松野自得が住職を務めた最善寺を訪問、中里麦外顧問の案内で松野自得の句碑、「御佛は大地におわす八重櫻」など俳句の功績を偲びました。

天高し並ぶ埴輪の無音界

言霊の塚に棲みつく秋の声

木の実踏む埴輪に心奪はれて

風そよぐ小草に遊ぶ秋の蝶

連なりて塩辛蜻蛉五料沼

今日のこの黄泉に吹く風身にしむも

並びたる埴輪秋日に目を細め

埴輪立つ小二子古墳に秋の草

石室の中まで攻め来名残の蚊

石室の中はからっぽ秋めきぬ

石室の中の不思議や秋の蝶

めくるめく太古の墓や神無月

大室の沼打ちて継ぐ秋茜

秋惜しむ昔を偲ぶ松の幹

暑い中ひざを引きづり公園歩く

第三十一 回群馬県現代俳句協会大賞応募要項

応募内容

作品二十句(未発表)

二百字詰原稿用紙を使用 枠外に題名記入

別紙に題名・姓号・住所・電話

群馬県現代俳句協会員(会費納入者)

二千円(現金書留または郵便為替)

令和五年九月三十日(土) 必着

参加資格

参加費

賞

大賞一名(賞状及び三万円)

準賞若干名(賞状及び一万円)

高崎市吉井町本郷五六七―三

作品送付

堀越胡流方 群馬県現代俳句協会大賞係

石原玲子 石井紅楓 保泉初音 秋元俱子 久米桂子 中里麦外 吉田洋子 野村絃一 原田要三 田中裕子 河合秀美 真鍋俊男 柴崎光昭 大島知子 下城雅子

第十二回紙上俳句大会

令和四年八月二十日を締切とする夏の紙上俳句大会には四十八名の会員から百六十四句の投句が寄せられました。特別選者には特選三句、入選十二句を、その他参加者には特選一句、入選五句を選句、入賞者には賞品が贈られました。

入賞句

開けてひとり閉めてひとりの夏障子
老いてゆく身にも夢あり夏帽子
蛭狩いつか一人となつてをり
心にも人は住みしや門火焚く
重すぎる七夕竹の願い事
甚平の後ろ姿の頑固なる
赤トンボ止まり直して落ち着きぬ
禍福なき今を大事に冷奴
還らざる北の島見て昆布干す
石臼は亡母の丸みや土間涼し
冷奴くづせば解けるわだかまり
千枚田輪唱のごと青田波
帰省子に都会の匂ひもらひけり
ひそやかに余白をうめる秋の風
凌霄花ことば捨てたり育てたり
搔き終へて父と見つむる代田かな
桃を剥く傷つく言葉言いし夜に
現し世に線香立つると葱植える
火に果てむその自由はも火蛾のもの
山の声海のこゑ聞き夏惜しむ

細野彩扇
茂木房子
細井寿男
石原玲子
佐藤愛子
茂木房子
大沢友江
清水里子
水村幸雄
白井しげみ
秋元俱子
本田巖
水村幸雄
保泉初音
石原玲子
細井寿男
奈良千恵子
相澤礼子
中里麦外
本田巖

新涼やいつも風ある足のうら
縁側は祖母の遊び場小鳥来る
痛とつて目映ゆき青田青田かな
心太愚痴がのろけになりてをり
百段の燈百段の薄暑かな
道の駅パンは焼き立て麦の秋

一句抄

汗かきていくらか生きてゐる心地
風涼し野良着の胸のペンダント
引き算の暮らしもよろし豆の飯
夕虹を仰いで仕舞う畑仕事
詠み解けぬ石碑の字あり青胡桃
ひろびろと犬を呼ぶ声夕焼けて
孵化したる目高うようよ浮きてきし
昔の咄そうでもないぞ終戦忌
ねだる児のいない淋しさ爽竹桃
蜃気楼白帆のように母のおり
高原の少女のオブジェ土用東風
凡庸に生く冬瓜はうすみどり
ねむの花小さな川に小さな橋
安曇野の雲に乗りたき夏帽子
鐘の音の清しくなりぬ今朝の秋
見えぬ眼で見上ぐる空や星祭
コスモスが咲けば小径の生まれけり
冷し酒どこか毀れてゆくような
黴払ふ母愛用の料理本
惜命の痛さに白き蟬の羽化
残されし婆は老兵草倒す

芝根南
芝根南
水村幸雄
石井紅風
茂木房子
秋元俱子

二本松よし子
今井妙
小山泰子
大島知子
永沢瑞保
真鍋俊男
橋本雅子
大島和
高田多加江
河合秀美
武井波真
関口衣子
狩野優子
赤堀琴代
堀越胡流
小杉満喜子
石原道明
斎藤一平
原田要三
角田爽丘子
小林けさ子

一村の屋号飛び交う夏まつり
この家が子らのふるさと冷そうめん
秋澄むやマリア観音洞の奥
新涼や気分すつきりさて何する
ひまわりの大きく垂れし村境
こおろぎも親しと思ふ独りかな
人声の遠退きてより蛩増ゆ
炎暑かな草刈る翁の行者めく
流灯に家族増えたとメッセージ
麦の秋子供頃の水草小屋

みんなの広場

塩壺の位置をかえるも冬用意
骨董市日向ぼつこのものを買う
一病も生きる張り合いさくら咲く

詠みかけも読み継ぎもあり虚栗
傘寿待つ明日の糧に大根干す
烏瓜たぐつて昭和見つけたり

いつ時を山一色に秋夕焼
頬なづる風の色香に秋をみる
溪谷の秋をレンズに切り取りぬ

儘田 富貴子
朝倉 裕子
内田 豊子
安富 耕二
小野里 勲
久米 桂子
田中 恵子
矢澤 正夫
三島 梅子
横田 真智子

狩野 優子

赤堀 琴代

柴崎 光昭

赤い花いくつも置きて冬籠
覚えては忘れるコード山笑ふ
今日も無事子守を終へて夜の涼し

ほどほどの風の嬉しき初桜
菜園の野菜褒め合ふ日永かな
ひと息の重さ軽さやしやぼん玉

初蝶や胸の名札の揺るる道
年長児の園庭十周夏つばめ
麦秋の黄とは平和を願ふ色

湯上りの子の手の中に柚子ひとつ
山茶花や嫁ぎし日より見守られ
寒闇の中で寝息の安堵かな

人声の遠退きてより蛩増ゆ
手を振つて痩せつばちの児泳ぎだす
薄氷割るをさなはいつも冒険者

日輪に磨き抜かれし谷紅葉
紅葉かつ散る少年の日のかたぐるま
見えぬもの見える気のでて春の雪

多胡 五月

横田 真智子

千葉 則子

佐藤 愛子

田中 恵子

河合 秀美

(掲載は投句順)

シリーズ

私の一句

かたかごや小声に読みし相聞歌

林 宣子

父の友人から歳時記を頂き俳句を勧められました。初めて触れる季語から自然のうつろいや、日々のたわいない事柄が以前より新鮮に感じられるようになり、その後暫くして「ぬかるみ」に入会いたしました。

掲句は、平成六年頃に友人と栃木県の三轟山の片栗を訪ねたときのものです。雑木林の足下に片栗は群落しており、一對の葉と茎先に一つだけ花を付け、俯き、微かに揺れておりました。また、芽生えてから花を付けるまで永い年月を経ることです。木洩れ日と片栗に魅せられた帰路に万葉集の歌碑があり、そのときに湧き上がった一句です。

俳句を通じてその和に助けられながら、令和の今日まで日々を重ねることができ、時折、以前の俳句から懐かしい刻が甦ります。

山毛櫨林に響く瀬音や木の根明く

武井波真

近辺の桜が葉桜へと移りゆくころ、ふと山毛櫨の芽吹きが見たくなって玉原方面へ出掛けた折の一句。途中までは何度か行っているが、奥の方までは子供たちと行った以来久し振

り。すっかり整備されていて、昔、車で通った道は今も乗入れ禁止となっていた。

林の中へ一歩踏み入れると、太い山毛櫨の木々は雪の中であつた。芽吹きなどまだまだ先のこと。幸いにも太い木々の根元は「木の根明く」状態ではっきりと見える。行くほどに小川の水音が高まってくる。右側の林から雪解け水が砂利道へばしゃばしゃ。左側の小流れも雪解け水を受け入れ、全山水音だった。時々風のそよぎと鳥の声。やがて湧水の水飲み場や赤い鳥居、そして湿原。それに掛かる木道。この木道を駆け行く子供達の姿が浮かんできた。

保育器の中の万歳冬ぬくし

竹市 漣

初冬に誕生した孫は保育器の中にいました。

両手を大きく開いて万歳をして眠っていました。三千五百グラムの男の子。帝王切開のため一時保育器に入れたのですが、健康状態がよくすぐに出されました。両手を挙げている姿は万歳をしているように私には見えたのです。腕に抱くと喜びと感動が湧き上がってきました。

孫はその後すくすく成長し、現在、元気いっぱい的小学四年生です。

この句は第二十三回NHK全国大会において特選に入り、励みにもなり、私も万歳をしたような気分になった忘れられない一句です。



句集紹介

「青蘆」

原 田 要 三

「良寛の風」に次ぐ第二句集。白玉、木の実独楽など五章からなり、愛妻家らしく、「愛妻を詠んだ句が圧倒的に多い。」（佐怒賀正美「秋」主宰）

手に負へぬ萩括るべく妻を呼ぶ
ありなしの風聴く病者竹の秋
妻の笑み呼び覚まさんと草矢打つ

「秋」仮幻集同人

群馬県現代俳句協会会長

「夕焼空」

本 田 巖

大地を発露とし、生命の芽をはぐくんでいる第一句集。理科系の道を歩みながら詩や俳句の造形は深く、一方で耕人としての自負を貫いている。（鈴木章和「翡翠」主宰）

東ねては光で締める今年藁
父が来てぶつきら棒に葱を焼く
風呂敷を解きて夕焼放ちけり

「翡翠」「ロマネコンティ俳句ソシエテ」同人など
群馬県現代俳句協会会員

◆令和五年度行事予定

○群馬県現代俳句協会総会・俳句大会

令和五年四月九日（日）

○夏の紙上俳句大会

令和五年十月一日（日）

○吟行句会

令和五年十一月五日（日）

○研修句会

○群馬県現代俳句協会大賞募集

募集締切日が九月三十日に変更になりました

行事予定の詳細は会報、別紙参照

◆会費納入のお願い

群馬県現代俳句協会の年会費（千円）未納の方は、会計担当幹事まで送金願います。

【問合せ先】

〒三七〇〇〇〇四 高崎市井野町二六―四
会計幹事 保泉初音宛
TEL〇二七―三六―〇二九一

【振込先】

群馬県現代俳句協会
郵便振替口座 0020005188603

編集後記

新年あけましておめでとうございます。一年が恙なくありますようお願い申し上げます。
振り返りますと昨年は驚くような出来事に見舞われました。ウクライナに始まる戦争はロシアが核をちらつかせるなど、有事の言葉ががひしひしと肌に伝わってきました。コロナも弱体化しつつあるとはいえ、依然猛威を奮っています。そんな中、群馬県現代俳句協会はまだまだ元気です。宜しくご支援、ご協力のほどお願いいたします。

群馬県現代俳句協会会報第六十九号

発行日 令和五年（二〇二三年）一月十日

発行人 原田要三

編集者 河合秀美

発行所 群馬県現代俳句協会事務局

〒三七六―〇一四三 桐生市黒保根町宿廻九一―七三

電話 〇二七七―九六―三四九六

印刷 宏誠堂印刷